



岡部光明 ゼミナール

研究論文および卒業論文 の概要

2008 年度 秋学期

明治学院大学 国際学部

岡部光明ゼミナール

「2008年度秋学期 研究論文および卒業論文の概要」について

この冊子は、明治学院大学国際学部における岡部光明ゼミナールの履修者諸君が2008年度秋学期に執筆したタームペーパー（学期論文）、ならびに同学期に完成した卒業論文につき、その概要部分（目次および主要図表を含む）を取り出して印刷したものです。

さる春学期については、タームペーパーだけにつきその概要を印刷した「概要集」を初めて刊行しましたが、今学期はタームペーパーに加え、4年生の卒業論文も合わせたものとなりました。この冊子は、当ゼミナール「概要集」の第2号になりますが、タームペーパーと卒業論文の両方を含むものとしては初めてです。なお、これらすべてのタームペーパーと卒業論文は、発表検討会（2009年1月10日-11日、湘南国際村で実施）において報告され、そこでの議論を踏まえて改訂されたものです。

この冊子を作成したのは、従来と同様（1）個々の学生が手がけた研究の内容を残すことに意味があること、（2）ゼミ生がお互いに研究テーマを知り合うことによって問題意識を相互に向上させると期待できること、さらに（3）今後岡部ゼミを志望する諸君にとって同ゼミの進め方等について参考にしてもらうこと、などのためです。

ゼミナールの運営方式

岡部ゼミナールの運営方式をまず述べておきます。最大の特徴は、2年生、3年生、4年生（今年度は合計13名）が毎週2回、全員そろって演習室において三つの作業を並行して進めることによって学習と研究を進めたことです。

第一は、所定テキストの輪読と発表です。その目的は (1) 学術書や論文をしっかりと読み込む力をつけること、(2) 明晰な、正確な、そして効率的な日本語で発表し、討論する力をつけること (日本語の話し方の訓練)、この二つです。このうち (2) は論理力の訓練でもあり、国際的に通用する力を身に付けることを意味しています。明晰な日本語がしっかり話せないのに、英語が上手に (説得性のある話し方で) 話せることはありえません。日本語を話す時でも、常に意識して良い (明晰な) 言葉を使うという姿勢を身につけてもらうことを意図しています。

第二は、私が週 1 回、マクロ経済学の入門的知識ないし論文の書き方などについて講義を行い、履修者にこれらの最も基本的な知識を身につけてもらうことです。ゼミ履修生の中には、これまで経済学の基礎授業をほとんど受講していなかった諸君もいたので、最低限の共通の知識を持ってもらう必要があり、また他の授業では論文の書き方を学ぶ機会が少ないからです。

第三は、これが最もエネルギーを要する作業ですが、学期毎にタームペーパーを各学生に作成してもらうことです。この義務を課すのは、問題設定能力、解析力、論文構成能力、政策提言能力をしっかりと身に付けてもらうためです。これらの力量 (知的スキル)こそが大学でほんとうに学ぶべきことであり、学生にとって永続性のある実力になるわけです。こうした力量は、手引き書を読んだだけで身につくものではなく、あくまで具体的テーマについて研究論文を実際に作成することによってのみ本当に自分のものとすることができるものです。またタームペーパーの執筆においては、内容が他からの引用である場合にはその旨を必ず明記するなど、研究における誠実性などの重要原則 (academic integrity) を習得することも期待しています。

今学期のタームペーパーについて

ゼミ生諸君がタームペーパーを執筆するのは、今学期が春学期に続き2回目ですが、今回もまた概して見事な成果といえるものになりました（全13編）。タームペーパーは、いわゆるレポートとは異なり、小さいながらも学術論文の形式をとった研究論文です。今学期も、学期中の2回の間接報告のプロセスを経て学期末には見事な論文に仕上げられています。

当ゼミナールでは「日本経済の構造変化と政策課題」を一般的研究目標に掲げていますが、学生諸君がそれぞれ取り組む論文のテーマは、従来から彼らが個別に選定する方式を採っています。このため今回も、タームペーパーのテーマは国内面あるいは国際面で標準的な領域に関するもの（金融、マクロ経済、国際援助、企業など）のほか、斬新なものも少なくありませんでした（例えば、PFI、民営化される戦争、たばこ産業、外国政府ファンドなど）。テーマ決定における自主性、多様性は今後とも維持したいと考えています。

今年度の卒業論文について

今年度の岡部ゼミ4年生（6名）が提出した卒業論文は、いずれもすばらしい作品であり、私を感動させるものでした。卒論は大学4年間における学修の総まとめですが、それはレポートと異なり学術論文の形式をとった研究報告論文でなければなりません。したがって卒論は、独創性、分析の深さ、説得力、十分な分量、論文としての完成度、などの観点から総合的に評価される必要があります。

これらの尺度を適用した場合、6編の論文にむろん濃淡の差異はありますが、いずれも十分に高いレベルの作品になっていると判断しました。作品の個別的評価は差し

控えますが、今回の卒論は、ユニークなテーマを掲げたもの（独自性）、現在最も注目される社会問題を扱ったもの（問題意識の現代性）、既存の問題に新しい視点を取り入れようとしたもの（斬新性）、在学中における著者の海外フィールドワークの経験を研究動機としたもの（着実性）、総論とその一部を掘り下げた各論の二部によって構成されたもの（広さと深さ）、歴史的な原資料をたんねんに渉猟して執筆したものの（実証性）、のいずれかまたは二つ以上に該当する作品でした。とくに、著者が独自に作成した図表（分析の深さ）を少なからず含む論文が多かったうえ、いずれの論文もその構造が明確であり説得的な書き方になっていました（完成度の高さ）。また卒業論文としての分量も概して十分なものになっていました（大半が50～70ページ）。各執筆者は、これらの点を誇りに思っただけでしょう。なお、今回提出された卒論の評価は、一部の作品が「A」、その他多くの作品が「A+」でした（「B」以下はなし）。

大学学部生として卒論を仕上げるという作業は、一生に一度しかありません。このため、大学に提出したもの（簡易表紙をつけた綴り込み）の誤字脱字を正すとともに、論文としての体裁も十分整えるなどして改めてプリントし、そしてそれを製本すべきである（費用が多少かかるが）というのが私の考え方です。今回の卒論執筆者は、全員そうした対応をすることであり、喜ばしいと思います。

上記のように優れた卒論を完成することができたのは、4年生の秋学期になって急いで書き始めるというのではなく、4年次の春学期に完結した一つのタームペーパー（学期論文）を確実に仕上げ、秋学期にはそれを補完するような独立したタームペーパーをさらにもう一つ仕上げ、それら2編を編集して卒論にするという方法を採用したことによるところが大きい、と私は判断しています。卒業論文を作成するうえでは、

私が従来から強調しているとおり、このような着実な「積み重ね方式」によるのが取り組み易い方法であり、またリスクの少ない方法なのです。3年生の諸君は今年度すでにタームペーパーを2編完成させているわけですから、4年次になってからさらに2編を追加したうえで、それら4編をうまく編集することによって、分量的にも充実した（おそらく100ページを超える）立派な卒論にすることができるでしょう。

現在在籍している諸君は、今学期の成果を踏み台にして新年度にさらに飛躍してほしい。また4月から新規にこのゼミに参加される諸君は、当ゼミのこれまでの蓄積と伝統を受け継いで成長してほしいと思います。

なお、このゼミナールへの参加を希望される諸君は、いつでも相談に応じますから申し出てください。履修希望者は、勉学の熱意が十分ある限り、学年を問わず積極的に受け入れる方針です。

2009 年 1 月

明治学院大学 国際学部教授

岡部 光明

<http://www.meijigakuin.ac.jp/~okabemit/>

目次

第1部 2008年度秋学期チームペーパー

演習3 (4年生)

- ・サブプライムローン問題の影響と対応策 (及川雄嗣)12
- ・日本型PFIと英国型PFIの比較-相違点・問題点・可能性- (大久保航)14
- ・対アフリカ援助と国際社会の動向 (岡本えりか)16
- ・戦時下のキリスト教系学校の対応-明治学院の特異性- (杉山智映)18
- ・スウェーデンのEU加盟と同国におけるユーロ導入の展望 (中里祐太)20
- ・ハイブリッド型コーポレートガバナンス-トヨタ自動車の事例を用いて- (麦島玲香) 22

演習2 (3年生)

- ・日本の石油産業の最適構造とは (片谷謙)24
- ・変革する郵便局-日本郵政公社から日本郵政グループへ- (高橋知左)26
- ・タバコ産業とJTの戦略、そしてタバコの将来 (林潤平)28
- ・民間軍事会社-民営化される戦争- (平田玄樹)30
- ・台頭する政府系ファンド-現状と今後の課題- (堀江優妃)32

演習1 (2年生)

- ・円相場はどのようなメカニズムで決まるのか (日高歩)34
- ・南北問題の変容と残された課題 (藻垣静香)36

第2部 卒業論文

演習3 (4年生)

- ・サブプライムローン問題の意義と課題 (及川雄嗣)40
- ・都市再開発事業へのPFI導入-その可能性と課題の検証- (大久保 航)44
- ・日本の政府開発援助(ODA)と国際協力の傾向-対アフリカ援助を中心に (岡本えりか) 48
- ・戦時下のキリスト教系学校の対応-明治学院の特異性- (杉山智映)52
- ・欧州経済統合の進展とその評価-EUとスウェーデン,それぞれの視点から- (中里祐太)56
- ・環境変化とハイブリッド型コーポレートガバナンス-トヨタの事例を用いて (麦島玲香) 60

*

*

*